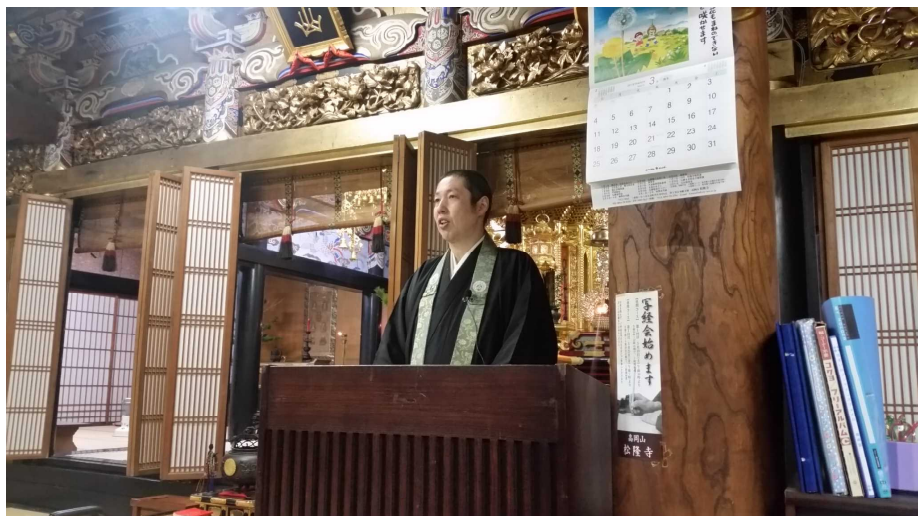


第十回日

阿下喜西念寺 山内 教真



発行責任者

員弁組連研部会長

蓮成寺 藤田 智善

第十回目のテーマ

「自分だけが幸せでよい
のでしょうか」

持ちであることがわかります。

また、多くの方が「誰かのために何かを為すこと」に喜びを感じたり、そのような行為を通して自身の内面が変化していくことを実感しているようでもあります。やりがいを感じている、心が通じ合うことをうれしく思う、という意見や、自分のためでもあるという意見が聞かれました。「私以外の誰か」への思いを、いかにみなさんが大切に考えているのか、ということが見て取れるでしょう。

私たちは様々な人々との関わりを持ちながら、毎日を暮らしています。当然のことながら、私たちは互いに支え、支えられて日々を過ごしている、とも言えます。話し合いの法座の中でも、そんな支え合いの事例を多く紹介していただきました。地域でボランティア活動に勤しむ方、我が子の学校行事への参画から交流を持つようになった方、あるいは病で苦しむ友人の心の支えになった方など、ほとんどの方がなにかの経験をお

と同時に、家族や仕事など自分の生活を犠牲にしてまで他者のために尽くすことは、なかなか困難である、という意見も多くありました。時間的に、あるいは経済的に余裕があれば、そのような活動に身を投じることもできるが、実際はそこまでの余裕がない、とい

第1期 連研だより

月うのが本当のところではないでしようか。すべてを投げ捨てて他者のために生きるという行いは大変尊いものではあるけれども、今を生きることに精一杯の私にとつては到底達することのできない境地でもあります。ともすれば、私のことだけに目を向け、他者の苦しみは見ないようにするのが、私たちの偽らざる姿と言えるでしょう。

そもそも、仏さまに手をあわせるといふことはどういうことでしょうか。仏前に座ってお念仏をするといふことは、仏さまと一対一で向かい合い、仏さまのまなざしをこの身に受けるということなのです。そのまなざしは、私の本来の姿を明らかに照らし出すとともに、不完全な私を不完全なままに受け入れてくださる慈しみの光でもあります。自分のことで精一杯の私に

「そのままでもいいのだよ」と仰るのが、ふだん私たちが手をあわせている仏さまなのです。

そんなまなざしに支えられている私だからこそ、「他者へのまなざし」を捨てることができないのではないのでしょうか。誰かをその苦しみから救うことはなかなかできない私ではあるけれども、苦しみにあえぐ誰かへのまなざしを持ち続けることは可能です。その原動力となるのが、私をそのままに受け入れて、決して見すてることのない仏さまのまなざしなのです。仏さまからのまなざしを一身に浴びつつ、他者へのまなざしを決して捨てない生き方こそ、お念仏申す私たちの目指すべき姿ではないでしょうか。

A 会場 仏事作法講師 福泉寺 佐藤隆明 師

《仏事作法おさらい》
正信偈の唱法(1)

日常勤行聖典 P6(参考)

・行譜(ぎょうふ)と草譜(そうふ)の2つの唱え方があり、員弁は行譜を主に唱えることが多い。

・発声は「レ」の音で、70拍/分を目途にして唱える。

「引」のところは1拍伸ばします。

